

中世後半における Chester の経済趨勢

出 羽 秀 明

The economic trends in the later middle ages Chester

Hideaki Dewa

(一)

イングランド西部海岸のほぼ中央部、Dee 河口に位置するチェシャーの州都 Chester は、York や Lincoln などと共に古くから政治・経済・軍事・宗教の中心地として確立され¹⁾、中世を通じてイングランド北西部における最も重要な海港都市として機能した²⁾。港の立地条件としては、北西ヨーロッパ地域との貿易には極めて不利であったが、南ヨーロッパとの貿易にはイングランド北東部の港に比べてかなり有利であった。特に、アイルランドとの貿易には最も都合の良い位置にあり、Dee 河の河口から容易にアイルランドに行くことができた³⁾。海外貿易は Chester の繁栄基盤の一つであり、都市の商人や手工業者をはじめ周辺地域の人々に海外の商品を提供し、また、彼らの商品を売り捌くためのはげ口としての機能を担っていた。と同時に、イングランド北西部における重要な市場中心地でもあった。市門のイーストゲイトから北東に延びる街道 (Foregate Street) は Boughton で岐れ、一方は Manchester へ、他方は London に延び、市壁に沿って北に向う路 (Cow Lane) は Warrington に通じていた。そしてブリッジゲイト前の Dee 河に掛かる狭い橋から南に延びる道路は、Chester を北部ウェールズと結びつけた。こうした道路網を利用し、極めて多くの人々が Chester を訪れ、定期的にかかれていた週市や歳市で生鮮食料品や日用必需品をはじめ、農具、建築資材、羊毛、皮革などを購入して荷車や馬に積んで持ち帰った⁴⁾。こうした海外貿易や市場中心地としての活発な活動によって都市は繁栄し、市域は市壁のまわりに拡がり、家屋が北のノースゲイトの外や、南の Handbridge に、さらに Foregate Street に沿って立ち並んだ。そして市壁の外には貧しい人々やハンセン病患者のための救貧院が建てられた。市壁に囲まれた市内には、多くの店舗の他に伯爵 Hugh d'Avranches によって建てられた大修道院 (St. Werburgh's abbey)・尼僧院・修道士会の建物などがあった。こうした宗教的建物は農民の巡礼、祈願者を都市にひきつけた。また同職組合に

よって上演された聖史劇には、農村の人々が群れをなして見物にやってきた⁵⁾

15世紀に入って、都市の衰退を嘆く請願が繰り返し提出されるようになった。かつて Chester の港は、ウォーターゲイトで荷物の積み降ろしをする外国の商人や、そこに商品を持ち込む人々の群れで極めて込み合っており、それらの商人たちによって支払われる関税によって繁栄を維持してきた。しかし、15世紀半ばまでには海水による砂の流入・堆積によって港の水路は埋まって通りにくくなり、船舶は Chester から12マイル以内には近づくことができなくなった。1486年にヘンリー七世に宛てた請願には、「船舶は商品の積み降ろしをよりたやすくすることのできる同じ州の他の港に航行しているため、市はすっかり荒廃し、また、昔から Chester に住んでいた商人や富裕な職人たちが町を離れたため、市域内のほぼ1/4はさびれて、市壁も崩れ落ちている。」と記されていた⁶⁾。1300年に市の自治権と引き替えに国王への支払いを余儀なくされたフィーファーム (fee farm) は、Dee 河の沈泥による市の衰退を理由として、1445年には £100から £50に、1484年には £30に、さらに1486年には £20にまで減額が認められた。16世紀の経過に伴い貿易用船舶は次第に大型化の傾向にあり、スペインやフランスからワインや鉄を運ぶ大型船舶は、Wirral 半島の Shotwick, Burton, また Heswell, Hoylake などの埠頭に停泊することが次第に困難になりつつあった。ヘンリー八世の治世に市当局はこうした困難を克服するために、市からほぼ10miles 下流に大海向け船舶用の新たな埠頭の建設に取りかかった。しかし、この計画は絶えず都市の資源を浪費し続け、1580年代の初めにさらに £3,000の経費の必要があるといわれた。エリザベスの治世にも、しばしば都市の衰退に関する言及がなされ、繁栄回復のために Shrewsbury 織の導入や粗毛織物のステープル設置などが試みられた⁷⁾。

本稿は、Boston, Sandwich などと共に港の沈泥によって衰退を余儀なくされたとされる Chester の15・6世紀における貿易と産業の趨勢を明らかにすることを目的としている⁸⁾。

- 1) Chester の起源は、古代ローマ時代に遡りそこに築かれた要塞 (castrum) にはローマ軍団が駐屯していた。10世紀初頭には城壁都市としてデーン人に対する北西部イングランドの守りの要をなし、造幣所が建設された。エドワード懺悔王時代には少なくとも8名の造幣人が働き、活発な経済活動を展開していた。
- 2) Chester は、Palatine 伯領として国家の関税機構の枠外にあったが、1559年以降その機構に組み入れられ、ウェールズの Barmouth からランカシャーの Duddon までの港を含むヘッドポートとなった。K. P. Wilson, *Chester Customs Accounts, 1301–1566*, The Record Society of Lancashire and Cheshire, vol. CXL, Liverpool, p. 6 (1969) (以後、Customs Accounts と略記)
- 3) イングランドからアイルランドへの最初の植民はチェスター出身者で、13世紀には何人かが Dublin の市民に加入し、ギルド・マーチャントのメンバーとなっていた。H. J. Hewitt, *Mediaeval Cheshire*, Chetham Society, vol. 88, New Series, p. 135 n. 10 (1929)
- 4) 15世紀、内陸から都市に運び込まれた商品には cartload 当たり 4 d, horseload 当たり 1 d が、都市から運び出される商品にも同じ割合の税が課せられた。Customs Accounts, p. 12

- 5) Chester の聖史劇は, York, Coventry などよりも古く1375年には始められていた。同職ギルドによって演じられたので Mystery Plays と呼ばれ, 聖霊降臨節の最初の3日間に創世記の中から月曜日に9編, 火曜日に9編, 水曜日に6~7編が山車の上で演じられ, 1570年代まで続けられた。
- 6) R. H. Morris, *Chester in the Plantagenet and Tudor Reigns*, pp. 521-2 (1984)
- 7) R. H. Towney & E. Power, *Tudor Economic Documents*, vol. I, pp. 199-212 (1953)
- 8) H. J. Hewitt, *op cit.*, pp. 141-2, G. D. Ramsey, *English Overseas Trade in the Centuries of Emergence*, p. 152 (1957)

(二)

15・6世紀, Chester の大陸貿易の中心市場はフランスとスペインであり, 輸出商品は主に粗毛織物と皮革で, これらの商品と交換にワインと鉄が輸入された。輸出商品の原材料である羊毛と皮の多くはアイルランドから供給されたので, アイルランドとの貿易は Chester にとって極めて重要な意味を持っていた¹⁾。16世紀初めから30年代にかけて, Chester はフランス, スペインとの貿易の拡大によって空前の繁栄を享受した。

フランスからはワイン, 食酢, プルーン, オレンジ, 塩, 時にはタール, 明礬, 蜂蜜, テレピン油, クルミ, 香辛料などが輸入されたが, 主なものはワインであり, 主として Bordeaux と La Rochelle からもたらされた。すでに13世紀の終わりに Chester ではガスコニー・ワインが販売され, 14世紀に入って次第にその輸入量は増大した²⁾。1304年3月に William of Doncaster の船が70tuns のワインを積んで港に着いた³⁾。また, 1322年には8人の Chester 商人が, ワインを Bordeaux から運ぶために La Nicholas of Lymington 号をチャーターした⁴⁾。15世紀に入り, 最初の10年間のワイン輸入量は1,000tuns にも満たなかったが, 次第に増え, 次の10年間には2,000tuns を超えた⁵⁾。その後, 特に40年代以降には100年戦争の影響を受けて輸入量は減少し, 70年代の10年間には600tuns にも満たなかった。しかし, Piquigney の和平によるフランスとの関係の改善に伴って, 1475年以降ワイン貿易は徐々に回復し, 16世紀に入り急増した。16世紀10年代の10年間には2,500tuns に, そして30年代には同じ時期の Hull の輸入量を上回り, 3,000tuns にも及んだ⁶⁾。

スペインとの貿易は, 15世紀40年代に始まっており, エドワード四世の時代には定期的に行われるようになった。1473年に Fuenterrabia からの船が29tuns の鉄と12tuns ワインを積んで Redbank に到着した⁷⁾。それ以降はしばしば Bilbao, Bermeo, San Sebastian など, Biscay 湾の港から Chester に鉄やワインが輸入された。スペインからの輸入品は, 鉄とワインの他に鯨油, 蠟, 革, 甘草, ピッチ, 食酢, 羊毛など極めて広範に及んだ。しかし鉄は, 90年代の半ばまでその全てが外国商人によって扱われ, 年間の輸入量が100tuns を超えることは極めてまれで, 70年代の10年間には300tuns にも満たなかった。しかし, 16世紀に入って輸入量が急増し, 10年代の10年間には2,500tuns に, 30年代には4,000tuns を超え, 1537/8年の年間輸入量は

709tons を記録した。しかし、こうしたワイン及び鉄輸入の急増による貿易の拡大は、フランス、及びスペインとの政治関係の悪化に伴って、40年代には終わっていた⁸⁾。

ワインと鉄の見返り品として、Chester からは毛織物、羊皮、獣脂などが輸出されたが、主要な輸出品は粗毛織物で、特にスペインではランカシャーやヨークシャーなど、イングランド北部で織られた安価な粗毛織物の需要があった⁹⁾。ランカシャーの粗毛織物の製造中心地は、Bolton, Preston, Burnley, Manchester で、1535年に John Leland は、「Bolton apon Moore の週市の品の多くは粗毛織物と粗毛糸で、その周辺にある多くの村では粗毛織物が製造されている。」と記した¹⁰⁾。Preston では主として未染色 Kerseys が製造され、16世紀の初めから60年代にかけては織布工が著しく増加した。Brun 川のほとりの Burnley は16世紀に急速に発展し、その半ばには人口が1,200人前後にまでなった。ランカシャーの粗毛織物に必要な原料羊毛の大半はアイルランドからの輸入に依存し、Chester を通じてアイルランドから輸入された羊毛のほとんどはランカシャーに、そして幾分はヨークシャーなどにも供給された¹¹⁾。

アイルランドからは、13・4世紀には多量の穀物が輸入されていたが、その後モルト、大青、羊毛、粗毛織物、亜麻、羊皮などが輸入されるようになった¹²⁾。アイルランドへの輸出品は、15世紀半ばまでは主として塩であったが、その後毛織物が中心となり、他に明礬、マールムジー、ワイン、反物、刃物類、皮革、矢などが輸出された。16世紀、アイルランドからの羊毛輸出の増大に危機感をいだいたアイルランド議会は、1522年にアイルランドの毛織物工業を保護するため、羊毛輸出の全面的禁止を決定した¹³⁾。それにもかかわらず密貿易や国王のライセンスなどによって大量の羊毛が輸入された。1528年には Liverpool の商人の羊毛密輸が発覚し、逮捕された。1534年に John Travers は33sacks の羊毛を7年間にわたり Chester, Liverpool や Bristol へ、そして翌年に John Forster は年200stons の羊毛を輸入してよいという免許を与えられた¹⁴⁾。

ランカシャーの粗毛織物の一部分は、毛織物商らによって地方の人々にも販売されたが、多くは Chester, Bristol, Southampton, London などに運ばれ、そこから大陸、特にスペインに輸出された。Chester はこの時期かなりの Manchester cottons を扱っており、1530年代に Manchester の毛織物職人 John Webster は、Chester の商人 Charles Eton に £24の毛織物を販売した。1536/7年に Chester の Margaret Goodman 号が Cottons, Kerseys を、38/9年にはスペイン船が Manchester frieze, kerseys や Northern dozens, cottons を積んで出航した。その後の1547年に市自治体は「販売を目的に都市に Cottons を持ち込む Manchester やその近傍のすべての商人たちは、公設市場において Cottons 1^dにつき10p.を支払わねばならない」と命じた¹⁵⁾。

16世紀半ば以降、ランカシャーの粗毛織物の輸出は次第に London に集中するようになり、1560年代には、少なくとも16人のランカシャーの織元が London の Blackwell Hall を訪れ毛織物を販売した¹⁶⁾。1576年の6ヶ月間で156,161goads にのぼる Cottons が London から大陸に輸出されたが、そのうちの約43%にあたる67,154goads が Manchester cottons であった。そして

1594/5年には168,065goadsのうち、Manchesterを含めておそらくランカシャーで製造されたものが73,611goadsを占めた。Shrewsburyで仕上げされたウェールズのCottonsもほとんどが陸路Londonへ送られた。また、London商人は代理商をウェールズに送り毛織物を買占めた。¹⁷⁾このような輸出量の増大によるランカシャーの粗毛織物製造の拡大に伴って、アイルランドからChesterに輸入された羊毛は16世紀後半かなりの量を示し、1576/7年に1,921stons、そして92/3年には3,947stonsを記録した。この時期、アイルランドへは石鹼、ガラス、木製の食器、紙、家具、建築資材、レーズン、プルーン、アーモンド、砂糖、甘草、ホップ、サフランなど極めて多様な商品が輸出され、その量も増大した。1565/6年にはアイルランドへの輸出品目数は50種類にも及び、その年の総輸出額の約2/5、総輸入額の1/4、1582/3年にはそれぞれ3/4、1/3を占めた。¹⁸⁾

Chesterからの粗毛織物の輸出量は、1565/6年に25,600goadsを記録したが、その後下降線を辿り、1584/5年には10,500goadsと半減した。1580年にChesterの商人たちは枢密院に対して「ChesterをManchester cottonsを輸出できる唯一の港とするべきである」との請願を送った。¹⁹⁾しかし、LondonやBristolの商人はこの主張を無視し、引き続きManchester cottonsを大陸に送り続けた。その後、Chesterからは1592/3年に110goadsを積載した船がフランスへ向かったのみで、1600年には極く僅かの量がアイルランドへ輸出されたのが全てであった。

エリザベス治世の後半に、Manchester cottonsに代わって大陸への輸出商品の中心となったのは皮革であった。²⁰⁾アイルランドの羊をはじめ牛、アナグマ、鹿などの生皮や獣皮の量も16世紀後半から次第に増加した。羊皮の輸入量は、1562/3年の61,300dickersから1565/6年には80,250dickersに、そして1576/7年には16世紀を通じて最高の115,952dickersを記録した。²¹⁾その後、80年代には5～7万台を推移し、90年代に入り1592/3年には再び10万台に達し、106,386dickersが輸入された。これらの皮の一部は、Londonや他の皮革製造が盛んな地域に送られたが、大部分はChesterの皮革職人たちによって鞣皮や手袋などに加工され商人に販売された。²²⁾1584年にChesterの商人に与えられた鞣皮輸出の免許は、大陸への皮革輸出を刺激した。この免許はChester、あるいはそのメンバー港から12年間に10,000dickersの鞣皮輸出を認めたもので、その関税はdicker当たり1s.とされた。同じ年に、Peter Newallは2,000dickersの鞣皮輸出の免許を与えられた。²³⁾鞣皮の主要な市場はスペインであり、1584/5年にスペインへ113dickersが送られた。1585年5月に始まったイングランドとスペインとの戦いは、スペインとの直接貿易を極めて困難なものにした。Chesterの商人は、貿易港をそれまでのBiscay湾からフランスのSt. Jean de Luzへ移すことを余儀なくされた。1585年10月にはSt. Jean de Luz港から46tonsのスペインの鉄を積んだ船が着いた。この年にフランスへは465.5dickersの羊皮が輸出されたが、おそらくその大半はスペインの鉄と交換するために国境を越えたものと思われる。16世紀Chesterの貿易は、繁栄と衰退の間を揺れ動いており、30年代まではワインと鉄の輸入により繁栄を享受したが、4・50年代には輸入量が減少した。しかし、60年代には、

1568年にスペインとの貿易が停止されるまで高水準の鉄とワインの輸入によって繁栄した。鉄の輸入は、1562/3年の363tonsをピークとし、その後スペイン戦争の影響を受け下降線を辿ったが、8・90年代にはワイン輸入が著しく増大した。特に、80年代の輸入量は16世紀における最多量であった。アイルランドの皮と羊毛は、次第に Liverpool に多く送られるようになり、貿易量が拡大したにもかかわらず、Chester は16世紀後半に Bristol を除いたイングランドの西海岸で最も活発にアイルランドとの貿易を行った港であった。

- 1) Chester はフランス、スペインの他、時にはポルトガル、アゾレス諸島そしてヨーロッパ北部の Baltic などとも貿易を行った。D. M. Woodward, *The Trade of Elizabethan Chester*, pp. 49, 51, 53 (以後、*The Trade* と略記)
- 2) 1303年から外国商人のワイン輸入にトン当たり 2s の関税が課された。Customs Accounts, p. 5
- 3) 1295年に William の代理人は Chester と Anglesey で販売するために Gascony でワインを購入した。C. P. R., (1292–1301), p. 105
- 4) Customs Accounts, p. 21, n. 1, C. C1. R., (1318–23), p. 453
- 5) 1410–20年は15世紀で最も繁栄した10年で、合計2,154tuns が輸入された。
- 6) 1526/27年には593tuns に達した。Customs Accounts, p. 71
- 7) 1464/5年に初めて鉄の輸入にトン当たり 2s の関税が課された。Customs Accounts, p. 5
- 8) 40年代に John Offeley と Edmund Gee がワイン輸入の許可を与えられた。C. P. R., (1547–48), pp. 62, 247, その後、1558年3月30日の布告によりフランスからのワイン輸入は特別の許可なしには禁止された。C. P. R., (1557–78), p. 402
- 9) 1565/6年に輸出された粗毛織物25,600goads の内、75%の19,900goads がスペインへ送られた。イングランドでは主として rugs, friezes, kerseys, cottons の4種類の粗毛織物が製造された。Statutes of the Realm, 5&6 Edward VI., cap. 6 (An Act for the true making of Woollen Cloth, 1551), この時期 London を中心とするイングランドの主要輸出品は、末染色 Broadcloth であったが、それは南欧市場にとってあまりに高価で重かった。Kersey の1種である Straits は、14世紀半ば以降 Bristol, Exeter からフランス・スペインへ輸出された。N. S. B. Gras, *The Early English Customs System*, pp. 427, 431 (1918)
- 10) J. Leland, *Itinerary in England and Wales*, V, p. 43
- 11) 原料羊毛は、アイルランド産の他にランカシャー、ヨークシャー、ミッドランズの低品質のものが用いられた。P. J. Bouden, *The Wool Trade in Tudor and Stuart England*, pp. 37, 71 (1962)
- 12) C. P. R., (1313–17), p. 470, (1321–24), pp. 27, 229, C. C1, R., (1313–18), p. 299
- 13) Norman Lowe, *The Lancashire Textile Industry in the Sixteenth Century*, p. 10, Chetham Society, vol. xx, Third Series (1972)
- 14) *ibid*, pp. 11, 16, A. K. Longfield, *Anglo-Irishe Trade in the Sixteenth Century*, p. 78
- 15) R. H. Morris, *op. cit.*, p. 399, Customs Account, pp. 55, 59
- 16) G. D. Ramsey, *Distribution of the Cloth Industry in 1561–2*, pp. 361–9, E. H. R., LVII (1942), J. J. Bagley, Matthew Markland, a Wigan mercer, pp. 63, 65, *Transactions of the Lancashire and Cheshire Antiquarian Society*, vol., LXVIII (1959)
- 17) ヨークシャーの粗毛織物の London への集中については、例えば H. Heaton, *The Yorkshire Woollen and Worsted Industries*, (1965) Oxford, 1560年にマーチャントアドベンチャラーズから枢密院へ、「Bristow frizes, Welsh cottons そして Manchester cottons のほとんどがフランスで、残りはイタリ

ア・スペイン、そして若干が低地々方で消費される」と報告された。16世紀半ば以降マーチャントアドベンチャラーズは、特にイングランド北部で生産された粗毛織物を未染色のままアントワープに送り仕上げした後、南欧市場に再輸出した。R. H. Tawney & E. Power, *op. cit.*, vol. III, pp. 168, 199-210

- 18) Bristol は、アイルランドに対して西のアントワープの役割を果たしたとされるが、ダブリンを中心とするアイルランド東部との貿易は専ら Chester との間に行われた。T. S. Willan, *Studies in Elizabethan Foreign Trade*, p. 84 (1968) アイルランドとの貿易のほとんどは Dublin の商人によって担われ、1565/6年には総貿易量の80%に達した。大陸との貿易に従事した Chester の商人たちは、ほとんど関心を示さなかった。
- 19) C. S. P. D., 1581-90, p. 89 には「No objection to the shipment of Manchester cottons only at Chester」とあるが、ステープルの設置を認めたものか明らかではない。16世紀半ば以降の粗毛織物輸出量の減少は、この時期フランスで Say 織が導入・定着し、イングランドからの Kerseys に対して高率の関税を課したことにもよる。W. Cotton, *An Elizabethan Guild of the City of Exeter*, pp. 134-6 (1873)
- 20) 1536年から皮革輸出に dicker 当たり 1/4d, 外国商人には 4/9d の関税が課された。Customs Accounts, p. 6, Chester のマーチャントアドベンチャラーズは1554年以前にスペインへなめし革や羊皮を輸出していた。C. P. R., (1555-57), p. 38
- 21) 1 dicker は10dozen または120skins
- 22) 鞣皮工の Ralph Radford, Edward Bennett は、それぞれ商人の David, Lloyd, Charles Fitton に大量の羊皮を販売した。D. M. Woodward, *The Chester Leather Industry, 1558-1625*, p. 87, T. H. S. L. C., vol. 119 (1967) (以後、Leather Industry と略記)
- 23) D. M. Woodward, *The Trade*, pp. 94, 5, 1583年に Chester は、12,000dickers の皮革輸出の免許を与えられた。C. S. P. D., 1581-90, p. 89
- 24) ワイン輸入量の増大は、1567年にワイン関税（国内商人と外国商人にそれぞれトン当たり 50s 4 p, 53s 4 p が課されていた）の廃止によるものであった。D. M. Woodward, *The Trade*, p. 58

(三)

Chester は、イングランド西部における物資の集散地としても重要な機能を果たし、港を通じて輸入された商品は、チェシャーはもとより、ランカシャー、スタフォードシャーなど近隣の州や Coventry, York など遠隔の都市にも分配され、それらの地域や都市で生産された多くの商品が Chester に運ばれた。

各地の商人たちが、定期的にかかれた週市や歳市で商品を取引するため、また、自ら海外貿易に従事するために Chester を訪れた。Chester では週市の他に、洗礼者ヨハネの祝日 (St. John's Day) の 6 月 24 日、聖ミカエル祭の 9 月 24 日、そして聖マルチヌス祭の 11 月 11 日の年 3 回歳市が開かれた。市場は都市の中央にある St. Peter 教会の近くで開かれ、その期間中、市長は市場に設置された裁判所 (Court of the Pieds Poudreux) で即決権を与えられていた。6 月 24 日の大歳市は、13 世紀より St. Werburgh 修道院に対して門前で 3 日間開く権利が付与されていた。ほとんどの取引はこれらの週・歳市で行われ、市場の開催日は極めて多くの人々で

賑わった。州域内からもち込まれた主要な商品は塩と皮革であった。チェシャーの塩の精製は、チューダー朝に繁栄した産業の1つで、国内と海外に市場をもっていた¹⁾。塩の泉は Weaver 河沿いの Combermere から Nantwich にかけて広がっており、Nantwich は塩精製業の中心地であった。1530年代末に Nantwich を訪れた Leland は、町では300人が製塩業に携わっており、町は製塩に使う木材の煙で汚れている、と記している²⁾。また、皮革業は Macclesfield や Nantwich で盛んに営まれていた。Macclesfield では16世紀半ばまでに革手袋・馬具製造業が確立され、Nantwich 周辺の牧草地では放牧が行われ、塩の精製と並んで鞣皮業も繁栄していた。アイルランドから Chester に輸入された羊皮の若干は、これらの地域に送られ、そこで加工された鞣皮や革手袋は、Chester を通じて海外に輸出された。Chester の鞣皮工は牛や馬などの皮を州内や近隣の州から入手していた³⁾。製靴工は原材料を市内の鞣皮工や手袋製造工から入手したが、時には Newcastle under Lyme やランカシャーに仕入れに行った。16世紀の終わりから17世紀の初めにかけて、製靴工組合は靴を販売するために4人の代表をノーサンプトンシャーの Rothwell の歳市に送った。Rothwell までは Lichfield, Coventry, Lutterworth, Merket Harbrough を経てほぼ130miles、5日間の行程であり、そのための費用は組合のメンバーから徴収された。Rothwell の歳市は古くから馬市で知られており、14世紀には London の鞣皮工が訪れていた⁴⁾。

Chester を通じて輸出された粗毛織物はランカシャー、ヨークシャー、ウェールズ、ウエストモアランドなどからもたらされ、それらの地域にはその原材料であるアイルランド産の羊毛やくず羊毛が Chester から送られた。1470年から1500年の間に Manchester の織元である Richard Bexwick, Thomas Bridde, Richard Tetlow らが Chester での取引に従事し、Manchester の毛織物商 Thomas Goodear は、Chester の代理人 James Smith を通じて、アイルランドから亜麻や羊毛を輸入していた⁵⁾。そして、16世紀60年代に Manchester の Richard Fox が Chester を通じて糸を輸入した。ランカシャーへはこのような織物原料の他に、海外から輸入された種々の商品が送られた。Bolton 近くの Smithills にはワインと鉄が運ばれており、Gawthorpe Hall の Shuttleworth 家は、しばしば Chester を訪れてワイン、スペイン鉄、サック酒、ピッチ、絹、香辛料や石鹼などを購入していた⁶⁾。16世紀の終わりに Wiswell のヨーマン John Tasker の息子 Joiner が Chester の市民に加入した⁷⁾。

ヨークシャーからは dozens や straits の粗毛織物の他に Sheffield の刃物類がもたらされ、アイルランドや大陸に送られた。Chester と York は15世紀初めにはつながりをもっており、1419/20年には弓師の Rovert de Wenseley が市民に加入し、同じ年に弓師 William Thorneton が Chester を訪れている。1454・76年にはヨークシャーの John Taylor と Brian Wilkinson が、Chester からアイルランドへ毛織物を輸出している⁸⁾。

また、Chester はウェールズ北部への商品分配の中心地でもあり、帆布、亜麻、鉄、ワイン、石鹼、染料、明礬、ホップ、フライパンなどの多岐にわたる商品が Beaumaris や Caernarvon

に送られた。ウェールズからは粗毛織物の他、14世紀に Ogwen から大量のスレートが、Beumaris から鞣革や子羊の皮が、そして15世紀30・50年代に Anglesey から白石が Dee 河の水車のために送られた。⁹⁾

Chester は、Coventry の商人たちにとって Bristol と並んでアイルランドへの商品のはけ口であり、また、Chester を通じてアイルランドからは原料羊毛、糸、染料が持ち込まれた。1405年7月に Coventry の John Pickering は、Chester を通じて大青を輸入した。¹⁰⁾ Coventry にとって大青は「Coventry blue」を製造するのに欠かせない商品であった。Chester の関税帳簿に表われる John Leader, Richard Sharpe は、1421・37年、及び1450年に Coventry の市長を勤めた毛織物商で、1418/9年には Coventry の絹物商が Chester の市民に加入している。1473年10月21日に John Asshburne と John Swan は馬に荷物を積んで Chester を訪れ、25日には荷車に荷物を積んで帰ったと記されている。¹¹⁾ Chester の商人も Coventry を訪れて取引に従事し、1392年に Hugo Erl は、Coventry で仕立て屋 Iohanni de Oxenford に10Li の借金をした。Coventry のトリニティ・ギルドには、染料製造工をはじめ20人強の Chester の人々が加入していた。¹²⁾ シュロップシャーからも粗毛織物が送られ、Bridge North と Shrewsbury の織布工が1573/4・75/6年に市民に加入した。¹³⁾ 石工の息子 Robert が1528年に金銀細工師として市民に加入したように、Chester からも Shrewsbury で徒弟修業を終えて市民に加入した者がいた。¹⁴⁾ ウォーリックシャーの Burton Dasset の農場主である Peter Temple は、16世紀に家畜を Chester, Shrewsbury, Bridgenorth, Newport などでも買い入れ、London に送っており、1545年6月29日には Chester とシュロップシャーで37頭の牛を31Li 13s 4d で購入した。¹⁵⁾

こうした地域の他に、フrintシャーからは石炭が持ち込まれ、Whitford のヨーマンの息子 William ap Hugh は、Chester で指物師の従弟となり市民に加入した。また、Nottingham からは家畜が運ばれ、1575年3月に Bowden のヨーマン John Moores は、Newwarke upon Trent の肉屋 Thomas Forman の馬を盗んだ罪で訴えられた。そして、Lincoln の Alan le Clerk は、15世紀初めに Chester で羊毛の関税を支払った。また、カンバーランドの St. Bees, Whitehaven から Henry 七・八世の治世に鮭、タラ、皮革がもたらされ、1565年に Kendal の James Brogges が、Kendal Cottons を Chester からアイルランドに輸出した。¹⁶⁾

このような数多くの国内取引の中でも London との取引は、特に重要であった。London とはローマ街道によって結ばれており、この街道を利用してアイルランドとの度重なる戦いのための軍隊、武器、火薬などが輸送された他、香辛料や上質の毛織物が London から運ばれ、北西部の港に再分配された。そしてアイルランドから輸入された皮は、London の皮革業のために送られた。¹⁷⁾ 15世紀初頭 Chester の人々は London での取引に従事しており、1421年に Robert Halstede は、London の絹物商 John Typpus に10Li を超える借金をしていた。また、1462年には Westchester の金物商 Ralph Marshall が、London で Almain の商人達と取引していた。¹⁸⁾ エリザベスの治世に London との沿岸貿易は次第に拡大し、定期的に大量で広範の商品が

海路を利用して持ち込まれるようになった。その中にはワイン、鉄、縮戎用の土 (Fuller's earth) の他に、砂糖、矢、金敷き、アカネ染料、紙、ハカリ、プルーン、タール、スズなどが含まれていた。海路は最短距離の陸路の4倍以上もあったが、高さ高の商品の輸送には海路のほうが容易であった。1584年に London から着いた船舶にはマスカテル酒、ワイン、干しブドウ、ホップ、ライン川地方のぶどう酒、丁字などが積まれていた。Chester からは1568年に鮭が、そして16世紀末にはバターとチーズが送られた。¹⁹⁾ こうした London との沿岸貿易は、主に Chester 商人によって担われており、1556年に William Aldersey が、1561年には Richard Pole, Randall Manwaryng が London での借金によって訴えられた。1564年に London の市民で食料雑貨商の John Bull に借金をしていた Chester の金物商 Ralph Thornton は、その当時 London に住んでいた。また、1571年に William Ball と William Jones の2人は、London の絹物商と食料雑貨商に £150 にのぼる負債で訴えられた。²⁰⁾ 彼らの多くは Chester の海外貿易を担った主要な商人であり、大陸との貿易の帰路に London を訪れて、Chester に商品を持ち帰っていた。また、Chester から London に出て市民となった者もいた。1551年から53年の London の市民登録簿には3人の Chester 出身者が含まれており、その内の一人である Thomas Offeley は Chester 商人 William の息子で、London 市民で商人・仕立て屋の Stephen Kyrton のもとで、Hugh Draper は小間物商のもとで、他の1人は理髪・外科医のもとで徒弟修業をして市民権を得た。そして、1584/5年に Chester の市民に加入した London 商人の Laurence Gremesdich と金物商 Thomas Halwood は、ともに Chester の出身であった。²¹⁾ 逆に、London 商人の中にも、Chester の市民に加入した者や貿易に従事した者がいた。金物商の Rovert Cutt, 商人・仕立て商の Rovert Pavie や John Penteny, 小間物商の William Fox は、1565/6年にアイルランド貿易に従事していたし、1589/90年には London の染色工 Randle Stockton が、Chester の市民に加入した。²²⁾

- 1) Joan Beck, *Tudor Cheshire*, pp. 53, 4 (1969) 塩はランカシャー・ヨークシャー・ダービーシャー・ウェールズに送られた。
- 2) Nantwich には塩水の煮沸に使用する容器を製造した鉛鍛冶がいた。J. T. Driver, *Cheshier in the Later Middle Ages, 1399–1540*, p. 111 (1971)
- 3) 鞣皮工は肉屋からも皮を購入していた。1594年に鞣皮工の Ralph Radford の遺産目録には11人の肉屋への負債のリストが含まれている。D. M. Woodward, *Leather Industry*, p. 73
- 4) *ibid.*, p. 78
- 5) J. J. Bagley, *op. cit.*, p. 66
- 6) T. S. Willan, *The Inland Trade*, pp. 5, 6, 25 (1976) D. M. Woodward, *The Trade*, p. 71
- 7) J. H. E. Bennett, *The Rolls of the Freemen of the City of Chester, part I, 1392–1700*, p. 81, Lancashire and Cheshier Record Society (1906) (以後、Freemen's Roll と略記)
- 8) *Freemen's Roll*, p. 3, *Customs Accounts*, pp. 82–6, 97–8, 111, J. T. Driver, *op. cit.*, p. 100
- 9) K. P. Willson, *The Port of Chester in the Fifteenth Century*, p. 3, T. H. S. L. C., vol. 117 (1966)
- 10) J. T. Driver, *op. cit.*, p. 100, 1566年1月に Chester から Coventry Cloth が輸出された。Customs Accounts, p. 85

- 11) Customs Accounts, pp. 104–7, 111, 114, M. D. Harris, *The Coventry Leet Book*, pp. 213, 246, 252, M. D. Harris, *The Register of the Guild of the Holy Trinity, St. Mary St. John the Baptist and St. Katherine of Coventry*, p. 16, *Freemen's Roll*, p. 2
- 12) A. Beardwood, *The Statute Merchant Roll of Coventry 1392–1416*, p. 2 (1939)
- 13) *Freemen's Roll*, pp. 48, 9, 16世紀後半に Shrewsbury では26人の織布工と39人の剪毛工が市民に加入していた。H. E. Forrest, *Shrewsbury Burgess Roll*, (1924)
- 14) H. E. Forrest, *op. cit.*, pp. 131, 141, 239, 252, 15世紀に Drogheda の商人が Chester に送った 6 butts の鮭が Shrewsbury で販売された。E. M. Carus Wilson, *Medieval Merchant Venture*, p. 195 (1954)
- 15) N. W. Alcock, *Warwickshire Grazier and London Skinner, 1532–1555*, pp. 45, 48, 51, 55, *Record of Social and Economic History, New Series, IV* (1981)
- 16) *Freemen's Roll*, p. 82, C. P. R., (1572–75), p. 485, 1586年に穀物が不足した時, Hull からライ麦をもたらすべく Thomas Linial と David Lloyd が派遣された。D. M. Woodward, *The Trade*, p. 49, 石炭は, 16世紀以降家庭・工業用に広範に用いられるようになり, アイルランドや大陸に輸出された。Customs Accounts, p. 85
- 17) D. M. Woodward, *Leather Industry*, p. 71, J. A. Chartres, *Internal Trade in England, 1500–1700*, p. 37 (1977)
- 18) C. P. R., (1416–22), p. 347, C. Cl. R., (1461–68), p. 145
- 19) London からの商品は Chester からイングランド北部の港に分配された。Joan Beck, *op. cit.*, p. 10
- 20) C. P. R., (1555–57), p. 136, (1560–63), p. 372, (1563–66), p. 78, (1569–72), p. 182, William Aldersey は後出。Richard Pole は商人で1564/5年に市長となった。*Freemen's Roll*, pp. 19, 38, Randall Manwaryng は1527/8年に市民に加入した毛織物商。*Freemen's Roll*, p. 18, Ralph Thornton は1550/1年に市民に加入した。*Freemen's Roll*, p. 28, John Ball は1537/8年に手袋製造工として市民に加入し, 1568/9年に市長となった。*Freemen's Roll*, pp. 21, 41
- 21) Charles Welch, *Register of Freemen of the City of London*, pp. 11, 79, 109 (1908), *Freemen's Roll*, p. 61, Laurence は Chester 商人 Richard の, Thomas は理髪師 Robert の息子であった。
- 22) Customs Accounts, pp. 82, 83

(四)

海外及び国内商業に加えて, Chester は州内で最大の製造業の中心地でもあり, 市内には極めて多岐にわたる職業に従事する人々がいた。1392年から1600年の間の市民登録簿に記載された職種は, その内容の明らかなものだけでも101を数えた¹⁾

その中には市内に住む人々をはじめ, 取り引きや巡礼のために都市を訪れた多くの人々に食べ物, 飲み物, 宿を提供したパン屋, 酒醸造人, 料理師, 肉屋, 魚商, 宿屋の主人などがいた。特にパン屋と肉屋は多く, 16世紀を通してそれぞれ102・90人, 世紀の後半だけでも66・57人に達した²⁾。この時期, 酒の醸造は通常女性の仕事であったが, 大きな都市では醸造職人が醸造小屋でビールやエールを製造した。製粉工は Dee 河沿いの水車で粉を挽き, それをパン屋に供給した。

大工, 指物師, スレート屋根屋, 家具屋など建築・木工業に携わった職人も多かった。彼らは一軒の家屋を建てるために比較的長期間共に働いた。建築・木工業の部門には, レンガ製造

工、石工、ガラス工、左官、鉛管工、家具屋をはじめ車大工、ろくろ職人、木挽き師などもいた。彫刻師やオルガン製造職人は、石工やレンガ製造工らと共に、教会や裕福な市民の家で仕事に従事した。16世紀半ば以降から木材の潤沢な所を除いて、新しい家はレンガで作られるようになり、レンガの需要が増大しはじめた。スレートは、すでに14世紀に北ウェールズのOgwenから大量に送られた。チェシャーの土はレンガやタイルの製造に適していた。また、樽を製造した50人にもものぼる桶屋、そして弓矢の製造に携わった弓師や弓矢製造職人がいた。船大工は港のあるChesterでは欠かせなかった。このような食・住の部門に携わった職人の他に、金物商、刃物師、刷毛具製造工、蹄鉄工、鋳物工、研磨師、製帯工、金銀細工師、馬具金物工、しろめ細工師、ピン製造工、鍛冶屋など金属加工業に携わった者も多かった。特に、金物商と鍛冶屋は多く、16世紀にそれぞれ87・58人を数えた。荷物の運搬には馬が使われ、国内輸送の増加に伴って、馬具への需要が増大していた。金銀細工師は、1399年から1541年の間にほぼ30人の名前を確認することができ、彼らは主として裕福な階層での消費が増大しつつあった銀器の製造に従事した。1501年に市民権を得たChristopher Warminghamは、1543年2月22日にSt. Mary教会の銅製の十字架の修理に携わった。その他にも都市生活に欠かせない理髪職人、理髪外科医、公証人や書記などの専門職に携わる人々や運搬人、塗師、歌い手などもいた。

都市の住民が、独立の手工業者として仕事に就くためには7年間の徒弟修業を終え、親方の資格を得なければならなかった。徒弟の資格を有する者は、親方との間に修業と公平な扱いを保証するための契約書を交わした。契約書の登録費用は、市民の息子の場合は6s. 8p., よそ者または非市民の息子はその倍額とされた。徒弟期間が終了し、親方と組合に熟練者として認められた者は、親方の地位を取得するためにかなりの額の入会金を同職組合に支払わねばならなかった。1553年に承認されたパン屋の組合の規約では、徒弟の年季を終えて親方になる者には26s. 8p. が、よそ者には40s. の入会金が課された。1609年の製靴工組合の入会金は£8から£12であった。さらに、入会の際には入会金の他に、組合のメンバーに供する宴飲会の費用も負担しなければならなかった。³⁾

Chesterでの最大の職業グループは、皮革業に携わる人々であった。皮革業は古くから営まれており、特に、原材料である皮の供給地のアイルランドに近いという立地に恵まれて発展した。すでに13世紀にアイルランドからテンの皮が輸入され、歳市の合図にはSt. Peter's教会の外に大手袋をつるすのが古くからの慣習となっていた。製靴工は16世紀を通して144人、手袋製造工と鞣皮工もそれぞれ134・86人を数え、鞍作り師や毛皮商などを加えると皮革業に携わった者は総計440人を超え、全市民加入者の19.5%を占めた。とりわけ16世紀後半の増加は著しく、製靴工、手袋製造工、鞣皮工はそれぞれ120・85・79人を数え、総計319人に達し、市民加入者の20%を超えた。⁴⁾

15・6世紀には、毛織物業は都市から農村に移行しつつあり、チェシャーではペニン山脈の

麓の村々で多くの小屋住み農が粗毛織物を織っていた。Nantwich や Macclesfield などにはいくつかの縮絨水車があり、周辺の織布工たちが頻繁に使用した。粗毛織物は Stockport や Macclesfield の市場に出され、その大半は海外に送られたと思われる。1550年10月にフランス人の所有する船舶 Jennett of Pulgyn 号が海上で襲われた時、略奪された積み荷の中に 13Li 2s 6p の価額の 'Cheshyre cottons' と呼ばれる 18反と、66Li 13s 4p の価額の種々の色に染められた 'Cheshyre cottons' が 60反含まれていた⁵⁾。Chester にも毛織物業に携わる多くの職人がおり、織物・衣類製造業は皮革業に次いで盛んであった。Dee 河に架かる橋の近くに縮絨水車があり、1576年に London から輸出された Cottons 156, 161goads のうち、2,600goads は 'Cheshyre Cottons' であった⁶⁾。16世紀を通して、市民登録簿には 76人の織布工が登録されており、その他に毛織物の仕上げ・染色工程に携わった縮絨工、剪毛工、染色工、毛織物仕上げ工がいた。特に、毛織物を縮絨した後にケバを大鋏で剪りそろえた剪毛工は 90人にも達した。織物・衣類製造業の部門には刺繍職人、キャップ製造工、縁付き帽子製造職人、靴下工、仕立て屋など、完成品の製造に携わった職人も多かった。これらの中でも特に仕立て屋は多く、16世紀に 109人を数え、後半には縁付き帽子製造職人、刺繍職人、靴下工など、これまでになかった新たな職種が出現した。こうした毛織物の仕上げや衣類の製造に携わる職人の増大は、この時期に農村との競争によって、都市における毛織物業が衰退しつつあったことを物語っている。都市における毛織物業の回復を企図して、市長は 1575年に Shrewsbury 織を導入するために、Shrewsbury から何人かの職人を迎え入れる取り決めをした⁷⁾。

16世紀は毛織物業をはじめとし、都市の産業にとって極めて困難な時期であった。外国貿易の発展によって持ち込まれた多くの外国商品や国内の他の都市の生産物との競争にさらされ、諸産業はそれに適した地域に集中しはじめた。毛織のキャップは、次第に海外から輸入された帽子や、ロンドンで作られ始めていた新型フェルト帽に代わっていった。キャップ製造工は、1520年に絹物商がイングランドの他の都市から安価なキャップを仕入れて販売し、不公正な競争をしかけていると訴えた⁸⁾。1567年に新しい埠頭の建設費用として手袋製造工組合は週 1s. 3p. を、毛織物商組合は 3s. 9p. を寄付していたが、キャップ製造工組合は他の組合と共同で、僅か 3p. しか寄付することができなかった⁹⁾。16世紀後半からみられた諸組合の合併は、都市における産業の衰退を物語っている¹⁰⁾。例えば取引の減少から弓師、弓の弦張り師、弓矢製造職人は、お互いに助けあわねばならなかったし、食料雑貨商、金物商、絹物商、菓種商が、また、皮革業部門の手袋製造工、羊皮商、及び白鞣工が合同して 1つの組合を形成した。また、建築業に携わる業種の合同もあり、1590年には木工・木挽き師・スレート屋根屋の組合 (the Company of wrights, sawyers, and slaters) が、熟練していないよそ者に仕事をさせ、その賃金の一部を搾取していると訴えられた¹¹⁾。こうした産業の衰退は、一部手工業者たちが商業に携わるようになったことによって埋め合わされた。

Chester には小麦買い集め商、毛織物商、家畜商、食料雑貨商、小間物商、リンネル商、絹

物商、商人、行商人、蠟燭商、ブドー酒商、薬種商、書籍文具商など商業部門に携わる人が多くいた。とりわけ商人、毛織物商、絹物商、ブドー酒商は多く、16世紀にそれぞれ123・93・65・49人、商業部門全体では365人、全市民加入者の16%を超えた。¹²⁾

16世紀、都市の市政と商業は、商人らの寡頭制的支配集団の手中にあった。徒弟修業を終了して親方として認められた者が市民に加入して、都市の特権を享受するためには、極めて高額の入会金を必要とした。¹³⁾ 1558年に都市の統治機関である市議会の24人の構成員のうち、23人までが商人であった。13世紀初め以降、市域内における商業をコントロールしていたギルド・マーチャントは、1554年5月には新たに「the Master, Wardens and Commonalty of Merchant Adventurers of the City of Chester」の名称のもとに特許状を付与された。¹⁴⁾ メンバーの資格には商人の徒弟として7年間の修業が必要とされ、入会には£10の入会金を支払わなければならなかった。カンパニーのメンバーとなった者以外は貿易を行うことを禁止され、違反者には£20の罰金を科せられた。カンパニーはメンバーの利益を守るために、商業の諸特権から手工業者と小売り商人を締め出すことを試みた。しかし、成功した手工業者は貿易に参加し、都市の支配集団に参入することが可能であった。1554年のカンパニーのメンバーには、商人、絹物商、毛織物商の他、ビール醸造人、洋服仕立て屋、金物屋や製靴工が含まれていた。¹⁵⁾ アイルランドとの貿易には何人かの手袋製造職人、鞣皮工、鞍作り師、桶屋などの手工業者が携わっていた。¹⁶⁾ 裕福な手袋製造工は皮をはじめ羊毛やワイン、その上木材の取引にもかかわり、貧しい手工業者に卸売りをした。手袋製造工の Robert Brerewood は、1601年に£759を超す貿易商品を含めて£1,593余りの財産を所有していた。¹⁷⁾ 1555年に金物屋として市民権を得た John Middleton は、カンパニーのメンバーとなり60年代には専ら大陸との貿易に従事し、1570年にシェリフに選出された。¹⁸⁾

1) 本章は、主として市民登録簿 (the Rolls of the Freemen of the City of Chester) によるもので、市民登録簿は1392/3年から1804/5年までの305年間にわたっており、その間の登録者は12,426人を数えている。市民加入者は15世紀以降から次第に増加し、15世紀の前・後半と16世紀前半の年平均は、10.8・12.5・20.9人で、16世紀後半には加入者の総計は1,651人、年平均33人となった。市民登録簿は、市長帳簿と市民登録帳から作成されたもので、前者には両親、加入の日付、徒弟修行による加入の場合には親方の名前と職業、自治権に付随した特権のために支払われた金額、及び父親の住む場所などが、後者には名前と職業が記載されている。

2) 1553年には少なくとも31人のパン屋が、1555年には18人の肉屋がいた。C. P. R., (1553-54), p. 134

3) R. H. Tawney & E. Power, op. cit., vol. 1, pp. 121-4, C. P. R., (1553-54), p. 134, D. M. Woodward, Leather Industry, pp. 92-3

4) 皮革業が盛んであった Norwich, Leicester, York などの割合より大きい。W. G. Hoskins, Provincial England, pp. 94, 5 (1965), J. F. Pound, The Social and Trade Structure of Norwich, 1525-1575, pp. 67-9, Past & Present, No. 34 (1966)

5) C. P. R., (1550-53), pp. 96, 7, Cheshire Cottons については、1551年の毛織物価格の上昇に関する報告書 (R. H. Tawney & E. Power, op. cit., p. 191) や、London の港湾帳簿にも見られる。

- 6) Chester から大陸へ輸出された粗毛織物のなかに Chester Russetts があった。D. M. Woodward, *The Trade*, p. 44
- 7) R. H. Morris, *op. cit.*, p. 408
- 8) R. H. Tawney & E. Power, *op. cit.*, p. 109
- 9) G. Unwin, *Industrial Organization in the Sixteenth and Seventeenth Centuries*, p. 72 (1904)
- 10) 15世紀末に Chester には25の同職組合があり, 1540年に結成された理髪外科医の組合が最後の組合であった。Joan Beck, *op. cit.*, p. 49, それぞれの組合は, 特定の商品の製造と販売に関する独占権をもち, 成員の利益を保護するために非組合員や他の組合からの特権の侵害に対して常に注意深く監視した。1553年のパン屋の組合の規約では, 組合員は常に十分なパンを供給することを義務づけられ, 組合に加入を認められていない者はパンの製造に携わることを禁止され, 違反には53s. 4 p. の罰金が課された。C. P. R., (1553-54), p. 134
- 11) G. Unwin, *op. cit.*, pp. 39, 66, C. Gross, *The Gild Merchant*, vol. 2, p. 129, n. 29, (1964) 1577年に毛織物商と靴下製造工の組合 (The Draper's and Hosier's Company) が特許状を付与された。C. P. R., (1575-78), p. 517
- 12) 商人 (merchant) は, 海外貿易に従事し小売りではなく卸売りで商品を販売した。他の者, 例えば毛織物商は, もともと製造業者から毛織物を仕入れ, それを店舗で小売りしたり商人に販売した。C. Gross, *op. cit.*, p. 362
- 13) 1568年に Richard Knee が市民に加入した時, 入会金は £40とされた。Freemen's Roll, p. 40, 15世紀70年代にはマーチャントギルドへの加入と市民への加入は区別されていた。Customs Accounts, p. 16
- 14) C. P. R., (1553-4), p. 322, C. Gross, *op. cit.*, vol. 2, pp. 360-2 Chester のギルド・マーチャントは, 13世紀の初めに Randle Blundeville 伯によって認められ, 6月の歳市を除く週・歳市を開く権利を持った。J. Beck, *op. cit.*, p. 16
- 15) Customs Accounts, pp. 77, 78, 81
- 16) *ibid.*, pp. 76-81, 138, 142, D. M. Woodward, *Leather Industry*, pp. 81, 108
- 17) Freemen's Roll, pp. 31, 89, John は1565/6年に3,200goads の毛織物を輸出した中心的商人で, 1605年に息子の Randle が市民に加入した時には商人と記された。

(五)

15世紀に請願で繰り返し述べられた「河口の沈泥による衰退」は, 多分に誇張されたものであり, 衰退の理由を正当化するためのものにすぎなかった。15世紀40年代以降にワインの輸入量は次第に減少したが, スペインとの貿易はそれを十分に埋め合わせたし, アイルランド貿易は, 15世紀を通じて著しい衰退は見られなかった。確かに, 河口における沈泥によって Dee 河から得ていた利益は絶え間なく減少し, 発展は妨げられた。しかし, 河口の沈泥はすでに14世紀初めから進行しており, 高潮の時を除いてどのような大きさの船舶も Chester に到達するのが困難になっていた。1302/3年に Dartmouth の船は Wirral 半島の Heswall 埠頭で積み荷を降ろした。積み荷は, Heswall 埠頭ではしけや荷車に移し換えられて Chester に運ばれた。1358年にウェールズから持ち込まれた大量のスレートは, Shotwick 埠頭で陸揚げされ, 荷車で城まで運ばれた。¹⁾ 16世紀に入り大型船舶用に新たな埠頭の建設が始められた。しかし, 16世

紀初めから30年代にかけての著しい貿易の拡大は、港の改良が試みられる以前のものであった。また、埠頭の建設が失敗したにもかかわらず、16世紀後半以降アイルランドからの羊毛・皮の輸入量は増大を示したし、フランスからのワイン輸入は80年代に急増し、16世紀中で最高量を記録した。²⁾

16世紀30年代までの貿易の拡大は、ランカシャーにおける粗毛織物業の発展と結びついており、その原料羊毛に対する需要の増大はアイルランドとの貿易を刺激した。粗毛織物は大陸貿易に従事した商人の主要輸出品となり、フランスやスペイン商人に戻りの荷を提供した。その後、40年代以降のスランプは、フランスやスペインとの政治的関係の悪化と、London 商人による市場の侵蝕によるものであった。ランカシャーの粗毛織物のほとんどが陸路 London に運ばれ、London 商人の手によって、大陸市場に出荷された。地方港市 Chester にとって London はあまりに強大な競争相手であった。この時期の Chester の人口を見積もる史料はないが、1630年には約850世帯、4,250人と推定されており、おそらく16世紀にはこれより少数であったものと推測される。London の人口は1520年に6万人を超え、1600年には20万人にも達していた。1580年代に Chester をコットンのステープルとするべく要請した時、Shrewsbury は Chester が立地条件、商人、資源において London に劣るという理由から反対した。³⁾

Chester の貿易は、16世紀が経過するに伴い極く限られた商人に掌握されていった。1565/6年には31人の Chester 商人が大陸貿易に従事していたが、1576/7年には21人、そして1592/3年には僅か17人にまで減少した。⁴⁾ 大陸との貿易に従事した主要な商人たちは、市長、市参事会員やシェリフといった要職に就き、市政のみならず経済をも支配した。⁵⁾ Aldersey 家は、16世紀における Chester の代表的商人の一族であり、その基盤を築いた William は1539/40年にシェリフに、そして1553年に商人組合の初代総裁となり、その後1560/1年には市長の職に就いた。William の3人の息子である John, Thomas, Foulk も大陸との貿易に従事し、John と Foulk はそれぞれ1603/4、1594/5年に市長の職に就いた。⁶⁾ 彼らは貿易活動によって蓄積した富をより安全な土地に投資した。Foulk Aldersey は、市内とその郊外に、そしてフrintシャーの Hawarden にも土地を所有した。Ralph Aldersey の次男 William も多くの土地財産を所有し、後に完全に貿易活動から退き、牧場経営に携わった。⁷⁾

1577年に、スペインとポルトガルを貿易地域とするスペインカンパニーが設立され、Chester にも支店が設立された。メンバーの資格は、1568年の通商停止以前にこの地域との貿易に従事していた者のみに限定され、小売商と手工業者には全く加入が認められず、もぐりで貿易した者には商品価額の25%が科料として課された。貿易から締め出された小売商らは強力な反対運動をおこし、1589年にはすべての小売り商人が海外貿易に従事することが許された。また、貿易を望む全ての小売商、手工業者はマーチャント・アドベンチャラーズカンパニーへの加入を認められ、羊皮輸出の免許の利益を享受することができるようになった。⁸⁾ しかし、すでに1585年以降スペインとの直接貿易は一部を除き途絶えていたし、大陸との貿易を望む小売商も

数人しかいなかった。1605年にスペインカンパニーの新たな特許状が付与された時、15の外港から多数のメンバーが加入したが、ChesterからはFoulk Aldersey, William Alderseyら4人が加入したのみであった⁹⁾。新たな埠頭は、1589年になっても依然として未完成のままであった。都市の資金と支配階層を形成した商人の意欲の欠如を反映していた。

- 1) K. P. Wilson, op. cit., p. 3
- 2) アイルランドからの羊毛、皮の輸入は、16世紀後半から増大し、1576/7年に羊皮の輸入量は16世紀で最高を記録し、フランスからのワイン輸入も80年代に急増した。
- 3) R. H. Tawney & E. Power, op. cit., vol. I, pp. 199–212, 16世紀ウェールズの毛織物はOswestryからShrewsburyに送られ、そこで仕上げされ、ほとんどがLondonに送られていた。T. C. Mendenhall, *The Shrewsbury Drapers and the Welsh Wool Trade in the Sixteenth and Seventeenth Centuries*, p. 134 (1953)
- 4) 1562/3年に8人の商人が鉄・ワイン輸入の50%を、1602/3年には8人の商人がそれぞれ、63・83%を、そして、皮革輸出の91%を支配した。D. M. Woodward, op. cit., pp. 59, 61, 1565/6年に大陸への粗毛織物の輸出に携わった27人のうち、13人はたった1回のみで、2,000goads以上扱ったのは2人のみであった。15582/3年には22人で、2,000goads以上はRoger Hanmerのみであった。Norman Lowe, op. cit., p. 75
- 5) 1500–44年の間に、ワインまたは鉄貿易に従事した29人のうち、20人は少なくとも1回市長になった。Ralph Davenport は1489/90, 93/94, 1501/02, William Davidson は1517/18, 22/23, Hugh Aldersey は1528/29, William Goodman は1532/33, 36/37, Ralph Rogerson は1534/35年に市長を勤めた。J. T. Driver, op. cit., p. 104
- 6) *Freemen's Roll*, pp. 35, 36, 40, 42, 73, 87
- 7) 1543年に生まれ、68年に市民に加入し、95/6年に市長となり、1616年に死亡した。*Freemen's Roll*, pp. 40, 74, 101
- 8) R. H. Morris, op. cit., pp. 463–8
- 9) 2人のAlderseyはassistantsに指名された。そのほかWilliam Johnson, George Boysが加入した。French CompanyにはLiverpoolから3人が加入したが、Chester商人は加入していない。C. T. Carr, *Select Charters of Trading Companies*, pp. 62–78 (1931)